紳士でメイドなオレがモテない理由
MENU
他人の代表
http://www.tanin.jp/

紳士でメイドなオレがモテない理由
他人の代表

第一章　オレがメイドを始めた理由（わけ）

オレの名前は美波真澄。
姓も名も女の子の名前みたいでよく誤解されるが、今年で高校二年になる男子高校生だ。
オレは格好いい男に憧れていて、日々鍛錬を欠かさない。
喧嘩には強くなった。
ここいらの不良はみんなオレに凄んだりしない。
オレが軽く殴っても逆に喜ぶくらいだ。
位置的にアントニオさんと同レベルだ。
女の子には紳士（ジェントルマン）たれ、という信条の下、常に優しさを持って接している。
レディーファーストは元より、常に女の子の性格や行動を研究して、誰よりも女の子を理解している野郎、という自信がある。
もちろん自分のファッションセンスも磨きに磨いて、女の子が好きそうな話題にも事欠かない。
ヘアスタイルは、うちの学校、校則が緩いから、髪も伸ばしてロン毛みたいにしてる。
ロン毛なんて古いとか言われるけど、いい男なら必ず似合う髪型だよな。
無精と思われないように、裾は切り揃えているし、毎日念入りに手入れしていて、ブラッシングも欠かさない。
もはや完璧と言ってもいいくらい努力している。
ここまですれば、まあ、少しは女の子にモテてもいいものだと思うけど、オレは生まれて十六年と半年、いまだに彼女がいたことはないし、モテたこともない。
いや、自分で言うのもなんだけどさ、オレ、結構いい顔立ちしてんだぜ？
髪だけじゃなく肌も毎日手入れしているし、清潔で髪もサラサラで、男からも女からも「綺麗で整った顔立ち」とか言われてるんだ。
女友達も結構多い。
むしろ男友達より多いと思う。
親友って呼べるほど仲がいいのも女の子だしな。
だけど、オレと恋をしたいって女の子は現れな

い。

オレが告白しても大抵は笑って無視(スルー)されて、なかったことにされるっていう最悪のフラれ方しかしない。

まあ、オレも分かってはいるんだ。

オレがモテないのは、生まれついてのこのカラダに原因があるのは分かってる。

もし、オレのカラダがそこらにいる普通の男だったら、モテるまでは行かないにしても、彼女くらいいただろう。

まあ、なんていうか、オレの身長は女の子並しかない。

女の子によってはオレより背が高いこともあって、オレはよく可愛いとか、男にとっては不名誉な評価をされることも多い。

それが悔しくて仕方がない。

もう少し高身長があれば変わってくるかも知れない。

ああ、うん、分かってる。

身長が低いことはハンデだけど、それでモテないってことはない。

もし、オレのカラダが、そこいらにいて、女の子と同じくらいの身長の男だったら、これだけ努力していれば、彼女の一人くらい出来るかもしれない。

オレがモテない原因は他にある。

それは、それだけは認めたくない。

認めたくないけど、オレの周りの世界がそう動いているんだからどうしようもない。

オレの最大の欠点、それはオレのこの顔だ。

いや、さっきも言ったけど、オレの顔は整って綺麗な方だと思う。

でも、それでもオレの顔のせいで、女の子たちが友達以上に踏み出せないのも事実だ。

この顔の何がダメなのか、親しい女の子に聞いたことがある。

すると、口々にこんな答えが返ってきた。

「うーん、自分より可愛い子はちょっとね」

「マスミの事は女友達としてしか見れないかな」

「あ、ごめん、私、百合の気ないんだ」

そう、分かるとおり、オレの見た目は女の子そのものらしい。

しかも相当可愛い部類の美少女みたいだ。

オレに女友達が多いのも、オレを女として扱ってるからってところがあるんじゃないかと思う。
オレの自慢のロン毛も、セミロングの可愛い女の子に見えるらしい。
男子も同じような反応で、オレを女として認識してるところもあるように見える。
それどころか、男子でやった「クラスの可愛い子ランキング」で、オレが女子を抜いて一位に輝いたらしい。
街の不良達の間では、オレはアイドルらしく、オレに殴られるのは、握手とかハグと同じ意味があるらしい。
レディースデーで買い物をすると、何も言わなくても値引きやサービスされてしまう。
だから、オレが喧嘩に強かろうが、女の子に優しかろうが、オレに惚れる女の子はいない。
見た目という、その一点だけで、オレは男扱いされてないんだよ。
ただ単に強くて優しい一人の『女の子』として、友達になるってだけだ。
この、見た目のインパクトを潰すのは並大抵じゃない。

だから、オレは高校二年生の今日まで、一度も彼女がいたことがない。
ちくしょう、男は顔じゃねえだろ。
そんな事を愚痴ると、周りの男が元気づけられてしまう。
そんな暗い日々を送っていた。
「彼女が欲しいなあ……」
ため息をつきながらとぼとぼと帰宅する放課後。
「直接的ねえ。そんなんだから出来ないんじゃないの？」
オレの隣を歩いてた五十音（いろは）が笑う。
「そんなんじゃなくても出来ねえんだよ……五十音、そろそろオレ達――」
「駄ー目。恋人のかわりに親友を失いたくないもん」
楽しそうに笑うこいつは遠藤五十音。
オレを親友と呼んでくれる友達だ。
長いストレートの髪が似合う美人で、スタイルも良く、賢くて空気も読める女の子だ。
ノリもいいし、男なら絶対ほっとかない、最高

の女の子で、事実オレもほっといてないんだが、そのガードの堅さは鉄壁を誇る。
まあ、それでもそこらの男はいいよ、ガードされるだけだからさ。
オレなんてそもそも男として見られてないんだよ。
もちろん知識としてオレが男って事は知ってるんだろうけど、それをさほど重要な事と認識していない節がある。
そこ重要だろ、と思うんだが、五十音は例えば「私の友達って金髪なのよ」程度の感覚しかないんだよな、オレの男って部分が。
だからこいつは、オレのことを『自分と同レベルの女の子』って感じで仲良くしてるような気がする。
女の子の友達同士って、同じレベルの子同士で仲良くしたりするけど、オレはこの美少女に同レベルに可愛く、センスも同じくらいだと認識されているわけだ。
「はあ……オレの恋人になったら、そいつは絶対幸せにしてやるんだけどなあ」
「ますみんの場合、付き合ってなくっても優しくするでしょ？」
「そりゃ、女の子に優しくするのは当然だろ？」
「だったら、付き合わなくてもいいじゃない」
そう言われると、身も蓋もない。
「女の子には紳士（ジェントルマン）たれ、がオレの信条だからな。女の子であれば誰にでも優しくするラテンの血が――」
「ますみんの家って武家じゃなかったっけ？」
「血統はな！　だけど、オレにはラテンの血が――」
「先祖代々日本人だったよね？」
「……うん」
オレは素直にそう認めた。
「でも、そうじゃなくってさ！」
「分かってるわよ。でも、ますみんの行動って全然ラテン系じゃないわよね」
からからと笑う五十音。
……まあ、確かにラテン系みたいなどこでも誰でも口説く人間じゃないけどさ。
そこは何ていうか、ノリとか勇み足で許してくれてもいいんじゃないか？

そういうのを許さないのが、こいつなんだよな。
五十音は、基本的にS（サド）だ。
オレの事もお気に入りのおもちゃと思ってるのかもしれない。
まあ、今更いちいちそんな事に文句を言わないけどな、オレも。
オレの信条は女の子に……って、ちょっとしつこいか。
長い髪を揺らしながら歩く姿だけは可愛いし、美人なんだけどな。
こんな子連れて歩けるってだけで幸せじゃないか。
まあ、物凄い確率でナンパされるけどな！
「それよりさ、ちょっと買い物に寄っていい？」
「買い物ってどこにだよ？」
「んー、とりあえずはアクアモールかな？　今度買う夏のワンピの下見に行こうかなって」
「パスする。じゃあな、また明日」
オレが五十音から離脱しようとするが、五十音はオレの腕に自分の腕を絡めて、逃げようとするオレを捕まえる。
「ふふーん、逃ーがさーない♪」
オレのすぐ横に五十音の悪戯をした時のような無邪気な顔。
その綺麗な顔が、あまりに近いので、オレは仰け反ろうとしたが、腕をつかまれているので顔を引き離すことが出来ない。
「なんでだよ！　オレなんか連れてっても、意味ねえだろっ！」
「あるわよ、一緒に服見て、次に何買おうか相談したり」
「オレ、夏のワンピとか買わねえし」
「試着し合って、似合うとか似合わないとか言い合ったり」
「夏のワンピ似合うって言われても、嬉しくねえし」
「一緒に買って、今度交換しよ、とか約束したり」
「オレのメンズSサイズはいくらでも貸してやるけど、お前の服はいらねえし！」
まただよ、五十音はオレがそういう話が嫌いなのを知ってて、そういう話を振って来るんだよな。
こういう細かいところにも、こいつのSっぷ（サド）

りが出てくる。
そして、この戦いはこれで終わりじゃない。
何故なら、オレの扱いを熟知してるこいつは、そろそろオレが逆らえない呪文を吐いてくるだろうからな。
「あらあ、ますみんともあろう男の中の男が、私の誘いを断るの？」
にやり、と切り札を出す五十音。
「くっ……」
オレの信条は女の子には優しく。
五十音のような可愛い女の子の誘いを断るって事は、恥をかかせるって事だ。
紳士(ジェントルマン)のオレにはそんなことは出来ない。
「……わかった、行くけど、試着なんてしないからな」
オレは渋々承諾をした。
「うんうん、分かってるって！」
百パーセント分かってない態度で、オレの腕に抱きついてくる五十音。
オレと五十音の身長はだいたい同じで、五十音が腕に抱きつくと、オレの二の腕に五十音のちょうどいい大きさの胸が押し当てられる。
柔らかい感触と、五十音の甘い香り。
何度も言うけど、オレはこう見えても普通の男だ。
「だから、離れろって！」
だから、こっちが恥ずかしくなってそう言うんだけど、振りほどくってのは女の子に失礼だからしない。
五十音の奴はそれを知ってるから、オレの言葉なんて無視(スルー)して抱きついたまま、アクアモールに向かう。
腕に抱きついた状態で歩くって距離感は、まあ、普通に見れば恋人の関係じゃないかと思うけど、五十音がオレに腕を組んでくるのは、あくまでも親友としてだし、周りから見てもオレ達は女の子同士でじゃれ合ってるようにしか見えない。
オレ、学校帰りで制服着てるんだけど、それでも大抵間違えられる。
いや、うちの学校って男女ブレザーで、一見で同じに見えるってのもあるんだけどさ、オレ、スカートじゃなくてパンツっていうかズボン履い

てて、普通なら分かりそうなもんなんだけどさ。
オレが履いてると、あの学校は女子でもズボン可なんだな、とか認識される。
いろいろ納得が行かないことも多いが、そこはオレが男らしさでカバーしていくしかない。
が、五十音はそもそもオレよりも何枚も上手だったりするからどうしようもないんだけどな。
「こっちの店に、ますみんに似合うワンピがあるのよ」
五十音に引っ張られながら女物の服を似合うとか言われるオレのどこに男らしさがあるかは秘密だ。
そうしてオレは連行される形でアクアモールに連れて行かれる。
さすがに駅前まで来ると人が多くて、オレたちと同じような学校帰りの生徒で溢れていた。
「そこの二人！」
そんな街中で、いきなり大きな声で呼び止められた。
そこってどこだよ、と思う呼び方ではオレ達かどうかも分からないので無視（スルー）しようと思ったんだが、一応呼ばれたのがオレ達かどうかを確認するために振り返った。
五十音と二人で歩いてて呼び止められる事は多い。
それはナンパだったり、ファッション雑誌の街角何とかだったりするので、普通は無視するんだが、今回は声が女の子だった。
女の子ならナンパはないだろう。
ま、面倒ごとかも知れないが、女の子が持って来る面倒ごとなら、誠心誠意を持って対処しなきゃならない。
そう考えて振り返ったオレの目に入って来たのは、街の雑踏と、道行く人々と、その視線。
みんな、さっきの大声の元を見ている。
その視線の先にいるのは、オレ達と同じ学校の制服を来てる女の子だった。
それは「あれ？　うちって附属中学なんてあったっけ？」と思うくらい小さい子だった。
小柄な体型に子供のような凹凸のない体型。
長い髪をまとめたツインテールがゆらゆらと揺れている。
表情も子供っぽいが、特にワガママっぽい感じ

がするのでちょっと面倒な気がした。
その女の子が、オレ達の方をじっと見つめている。
って事は、この子が呼んだのはオレ達なのか？
「えっと、呼んだのはオレ達の事か？」
こっちをじっと見てるし、多分そうだと思うけど、一応確認してみる。
「そうよっ」
その子はそう言うと、オレ達のところへ歩いてくる。
妙に生意気そうな態度がちょっとイラッとする。
「……？」
一体何の用だ？
女の子はオレ達に近づくと、至近距離でオレを見上げる。
幼いけど整った顔が眼前に迫る。
息がかかりそうな距離に、オレは仰け反ろうとするけど、五十音の拘束が解けてない状態なので、仰け反れず、近づかれるままだった。
「ふーん……」
女の子はオレを品定めするように見る。
「体型の割に胸は全然ないのね」
「あってたまるか！」
思わず怒鳴る。
なんなんだこの子は。
オレが女だったとしたらかなり失礼なことを言ったぞ、今。
ていうか、人の事言える胸か！　と思ったけど、紳士(ジェントルマン)は黙っておく。
その子はオレの声を無視して、今度は五十音に近づく。
やめろ、そっちは危険だ、などと思ったが、心の中で五十音にひどい目に遭わされろ、と考えたオレは紳士(ジェントルマン)失格。
「ふんふん……あんたはちゃんと胸はあるのね」
女の子は無遠慮に五十音の胸を指でつつく。
「きゃあっ！」
五十音が可愛い声を出す。
いつもしっかりしてて隙がない五十音にしては胸を触らせるなんて珍しい。
まあ、こんな女の子がいきなり触ってくるなん

てこと、考えもしなかったんだろう。
「何すんのよ！」
五十音はその指を振り払うために、やっとオレを開放する。
そして、こっちも何の躊躇もなく、両腕でツインテールをつかみ、左右に引っ張った。
「ぎゃぁぁぁぁぁっ！」
女の子は断末魔のような声を上げる。
初対面の五十音の胸を触る子と、髪を引っ張る五十音。
どっちもどっちだ。
女の子の叫びを聞いてちょっと口角が下がってる五十音がちょっと、いやかなり怖い。
「何すんのよ！」
「何されたと思ったの？」
「ツインテールを引っ張られた！」
「分かってんなら聞かないでよ」
「うがぁぁぁっ！」
女の子は五十音の髪をつかもうとするが、身長差もあり、あらかじめそれを警戒していた五十音に手を払われる。
そして、今度はハイキックをしようとするが、したこともない事をしたのか、足は全く上がらず、更にその足首を五十音につかまれる。
「わっ！　やっ！　やめっ！」
片足でバランスを取りつつ、パンツが見えないようにスカートを押さえる事に必死の女の子。
五十音はその、慌てる顔を見てにやり、とS笑（サド）いをする。
「さて、謝りなさい」
「ごめんなさいっ！」
泣きそうな声で叫ぶように即答する女の子。
勝てないと思ったらすぐに負けを認めるあたり、素直な子なのかもな。
五十音はそれを聞いて満足そうに足を離す。
オレはその一連の出来事を、ただ呆然と見ていた。
「で、何の用なの？」
「あ、うん、あのね……？」
五十音が改めて聞くと、女の子は素に戻って話をし始めたが、我に返って仕切り直すかのようにこほん、と咳をする。
「あんたたち、合格よ。うちで働きなさい」

ふんぞり返っても、ほとんどふくらみが見えない残念な胸を張って、意味不明な言葉を吐いた。
「行こ？　ますみん」
五十音がほぼ無視して、オレの腕を引っ張る。
「ちょっと待ってっ！　いい話だからっ！」
女の子が超胡散臭いセリフでオレ達を呼び止める。
テレビとかでよく聞くセリフだな。
そんなことを言う奴は大抵、嘘の儲け話を持ってくる奴か、残念な縁談を持ってくるオバちゃんくらいだろう。
「何に合格したか知らないけど、モデルとかはますみんが嫌がるからやらないわよ？」
「そんなんじゃないっ！　店員！　ウエイトレス！」
女の子が必死にオレ達を呼び止める。
あまりに必死なので、五十音も話くらいは聞こうと立ち止まった。
「店員ってどこの店よ？　ま、バイトもしたいと思ってたところだから、場合によっては聞いてあげるわよ？　とりあえず、時給はいくら？」
女の子は金額を口にする。
それはバイトとしてはかなり高額だった。
更にいろいろな手当も付くらしい。
魅力的だけど、ウエイトレスだけならオレは無理だ。
だってオレ、男だし。
「なによ、怪しい店じゃないでしょうね？」
「違うよ？　私も働いてるもん！」
女の子が主張する。
ま、この子が働いてるなら風俗じゃないだろう。
可愛い子だけど、そういう需要ななさそうな子だしな。
「で、結局何のバイトなのよ？」
「あのね、メイドカフェなんだけど……」
女の子がこっちの様子を伺いながら言う。
さっきまでの勢いはなく、こっちの様子を窺うようだった。
何だか拾ったばかりの子犬みたいで可愛い子だな。
「……メイドカフェ、ねえ……」
五十音は口に手を当てて考え込む。
仕事と時給を考えてやるかどうか考えてるん

だろう。
まあ、五十音はいいメイド店員になれると思う。
見た目はもちろんだけど、ノリのいい奴だし、はっきりと物を言うタイプだけど、我慢が出来ない奴じゃないし。
オレとしてはそれよりも、目の前の子がメイドをやってること自体が信じられないし想像できなかった。
いや、見た目も可愛い子だし、声だって可愛いけど、背格好は中学生の、しかも下の方の学年くらいにしか見えない。
この子がご奉仕とか、そんなことが出来るようには思えない。
一応うちの制服着てるから高校生なんだろうけどさ。
行ったことないから偏見かもしれないけど、メイドカフェって、スタイルのいい女の子のために作られた制服を着てるから、この子に合うのかなって気がしないでもない。
「で、メイドカフェの仕事ってなんなのよ？　変な仕事混ざってないでしょうね？」
「そんな仕事だったら私もしないもん！　好きにしていいって言われたから好きにしてるし」
好きにしていいのかよ。
「で？　どうしてあんたが街角でスカウトなんかしてんのよ？」
五十音が尋ねる。
そうだ、胡散臭さの原点はこの子がいきなり誘って来たってところにある。
可愛い女子高生だからまあ、話くらいは聞いたけど、これが大人の男だったりしたら怪しいとしか思わない。
五十音に聞かれると、女の子はうつむいた。
「……あのね？　メイド長にお友達の可愛い子、二人くらい連れてきたらお小遣いあげるって言われたの。でも、友達に私の働いてるところ見られたくなくって……」
女の子が小さな声で言う。
まあ、確かに学校の友達にバイト先でご奉仕してる姿を見られたくはないよな。
五十音なら元々の知り合いじゃないから恥ずかしくないし、同じ学校の制服だから、友達として紹介しても怪しまれない。
そう考えると、五十音ってのはちょうど良かっ

たのかも知れないな。
「なんだ、お金のためなのね」
女の子の照れとかいじらしさの部分は全く無視（スルー）して、五十音ははっきりと言う。
「……うん」
そしてそれを、女の子はあっさり認める。
「だったら問題ないわ。あなたは裏もなさそうだしね」
五十音の基準って、分かりにくいかもしれないけど、相手の打算や目的が分かったら、安心するタイプだ。
この子が金のためにスカウトをしてるのなら、それ以上裏はないと踏んだわけだ。
「本当!?　今から来れる？　二人とも」
「いいわよ、ますみん、ショッピングは中止していい？」
「おう、ってちょっとだけ待て」
流れでオレも入っていた気がしたのでとりあえず仕切り直そうとする。
「何よ？　そんなに遠くないわよ？　あ、私は華水田希麻（けすいだきま）。遠高の一年よ」
「おう、オレは美波真澄、遠高の二年だ。いや、それはともかくな？」
「私は遠藤五十音。二年よ」
「そっか、よろしく美波と遠藤」
「いや、そうじゃなくてだな……大きな問題を解決しようか」
なんだか、論点がずれたので戻そうとしてみる。
「そうよ、先輩なんだから敬語使いなさいよ！」
「いや、そこじゃなくって――」
「嫌よ！　なんでそんなの使わなきゃならないのよ！」
希麻と名乗った女の子がふん、と横を向く。
五十音がそのツインテールを両手でつかんでこっちを向かせる。
「ふぎゃあっ！　痛い痛い！」
髪を引っ張っれられる希麻が泣きそうな声を上げる。
「で？　何ていうのかしら？」
「遠藤先輩ごめんなさい！」
「よろしい」

五十音はぱっと手を離す。
希麻は痛そうに頭を撫でる。
「いや……」
あっけに取られてたオレは数秒後にやっと言葉を返す。
「何でしょう、美波先輩！」
直立不動で返事をする希麻。
「いや、呼び方はどうでもいいんだけどさ……」
「何よ、美波」
一瞬で態度が変わった。
まあいい、重要な事実だけ伝えよう。
「オレ、男なんだけど」
オレはオレがメイドカフェで働けない理由を簡単に告げた。
「は？　何でそんな一瞬で分かる嘘つくのよ！」
希麻は、オレの言葉を一ミリも信じなかった。
「嘘じゃねえって！　男の制服来てるだろ？」
オレは、胸を張って自分の制服を見せつける。
「あっ、本当だ！」
希麻は今気づいたらしく、オレの格好を見て驚いた。
さすがに同じ高校に言ってるこいつは男女ズボンでも可とは思わないだろう。
「なんで男装なんてしてるの？」
「男は普通、男装するもんだろ？」
「女は女装するものなのよ？」
「そうだな」
「で、なんで男装してるの？」
「堂々巡りじゃねえか！」
とりあえず突っ込んでみる。
「とにかく、オレは男だ」
「え？　でも、え？　え？」
驚いて戸惑って、それ以上の言葉が出て来なくなった希麻は、元々大きな目を更に開いてオレを見つめていた。
まあ、こういう反応はもう慣れたけどな。
「だからさ、オレがメイドカフェで働くのは無理なんだよ」
「……」
オレが言うと、希麻は黙り込んだ。
その目はきっ、オレを睨んだままだ。
「行ける……！」
「は？」
「あんたなら行けるわ！　大丈夫！　だから来

なさいよ！」
　とんでもないことを言い出した希麻。
「うん、それは私も保証するわ」
　面白いおもちゃを見つけたような表情で、五十音が勝手にオレを保証しやがった！
「ちょっと待て！　落ち着けって！　駄目だ！　オレはやらねえからな！」
　オレは慌てて拒否する。
「やりなさいよ！　男らしくないわね！」
「やる方が男らしくねえし！」
「つべこべ言わない！」
「言いたくねえけど言うしかねえだろ！」
「やーるーのーーーーっ！」
　駄々をこね始めた希麻。
　この子、本当に高校生か？
　五十音はおかしそうにそれを見てるし。
「落ち着けって！　オレはさ、男らしい男を目指してんだよ！　だから、女装してメイドカフェなんてやる気はないんだよ！」
「私が困ってたら助けるのが男らしさなの！」
「男らしさの定義狭いな！　いや、困ってたら助けるけど、お前の話ってただの小遣いじゃねえか」
「あっ！　困ってることある！　助けるの！　助けて！」
　オレにしがみついて、思いついたかのように叫ぶ希麻も、オレのこと男扱いする気ねえな！
　女の子がそう気安く男に抱きつくなよ！
　こう見えてオレの中身は男なんだぞ！　興奮もするんだぞ？
　ああもう！　いい匂いするなあ！　柔らかいなあ！
「な、何だよ困ってることって」
　オレは希麻を押し返しながら、話を聞いた。
「あのね、メイドカフェのロッカーから服がよく盗まれるの！」
「アコムにでも相談しろ」
「お金しか貸してくれない！」
「間違えた、セコムだ」
「そんなお金ない！」
「じゃあ、アコムに」
「堂々巡り！」
　堂々も巡ってないが、まあ不毛な話だな。
　そもそも、こんな時給払ってるカフェに金がな

いわけないだろ。
「とにかく！　美波はメイドになって潜入捜査！」
「いや、話が元に戻ってるんだが……」
このままだとまた駄々をこねられそうだな。
「あれ～？　ますみんは、困ってる乙女を助けないんだ～♪」
五十音という名の悪魔が楽しそうに言う。
こいつ、どうしてもオレをメイドにさせたいらしいな。
「そう乙女！　乙女を助けないでどうするのよ！」
そこに希麻も乗っかってオレを責める。
いや、お前は小遣い欲しいだけだろ。
とはいえ、五十音があっちに回った以上、多分どう抵抗してもメイドにさせられそうな気がする。
オレの信条は困ってる女の子がいたらどんなことをしてでも助ける事ってだ。
希麻が困ってる以上、助けるのがオレの道なんだが……メイドは無理、男らしさのかけらもないし。
ていうか、男がメイドカフェの店員やっていいわけないだろ？
こいつら常識ってもんがないのかよ？
……待てよ、希麻は小遣い欲しさに躍起になってるだけだ。
さすがに店長さんはまともだろうし、オレが働きたいと言っても雇わないんじゃないか？
この場は収拾しそうにないし、店長さんの常識に委ねるか。
「分かった、行ってもいいけどさ、店長さんにはオレが男って言うからな。それで駄目って言われたら駄目だ」
「えー、黙ってれば分からないわよ？」
「駄目だ！　オレは誠実に生きるが信条だ。人を騙してまで雇われたくはない」
「んー……分かった。それでいい」
希麻は不満げだが了承した。

紳士でメイドなオレがモテない理由
漢の娘系学園&メイド喫茶ラブコメ
B6　152ページ
700円
コミックマーケット87
28日　日曜日
西館の 07b
「他人の代表」